

## 「筋緊張」について

六地藏総合病院 リハビリテーション科  
渡邊裕文・大沼俊博

「筋緊張」という概念をあまり持たないリハビリテーション関連職種も多いと思われるなかで、今回この「筋緊張」をテーマにセミナーを行なう。我々がこの重力下で姿勢や運動をコントロールできているのは、様々な内のおよび外的感覚情報から中枢神経系が時々刻々と筋肉の状態を変化させていることが大きな一要因と考えられる。確かに徒手筋力検査で5レベルの筋力を発揮できることは必要であるが、我々の日常生活活動のなかで、はたして5レベルの筋力を発揮している筋肉がどの位あるのであろうか。いわゆる健常者でも左右差が必ず存在し、その左右差を作っている要因に筋肉の活動状態も大きく関与していると考えられる。例えばこのときこの左右差を説明する筋肉の活動状態をどのように表現したら良いのであろうか。また筋線維が多数存在する大腿四頭筋などの場合、徒手筋力検査では膝関節伸展5レベルであっても、左右を比べて内側広筋の活動状況が少ない際には、どのように表現したら良いのであろうか。これらの一つの回答として、「筋緊張」という概念を用いて表現できるのではないのであろうか。特に中枢神経系に障害がある場合、安静時からその筋緊張の状態は明らかに左右差が存在する。いわゆる麻痺と呼ばれているものである。しかし姿勢により若干変化し、その変化度合いは決して徒手筋力検査で測れる範囲のものではないことは、誰にも理解できることであろう。当然、麻痺筋には筋力の問題は存在する。また筋緊張という概念でも表現しきれない部分もあるが、筋力の問題も含めて「筋緊張」という用語を用いて、患者の症状を表現・理解するのが個人的には妥当ではないかと考えている。

本セミナーでは、時間的なことも考えて上記した概念的な話しは省略し、健常者を対象に、健常者に存在する左右差を「筋緊張」という概念から、皆さんで感じて頂こうと考えている。健常者もその生活してきた、生活している環境がそれぞれ違うため、同じ姿勢および動作でも全く同じパターンを示す人は存在しない。また本当に左右対称的で、運動学で習ったいわゆる重心線が整っている人もいないであろう。その上で一個人（健常者）における姿勢・運動パターンを捉え、そのパターンがどのような筋緊張から表出されているのか、視診および触診を中心に皆さんで考えていきたい。当然、分析も大切であるが、まず見ること、触れることから「筋緊張」を体感していくことを考えている。